歴史地理学　57－1（273）88-103　2015. 1

長崎の教会群と宗教ツーリズム

松　井　圭　介

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．「長崎の教会群」と世界遺産登録運動
　(1) 何が評価されたのか
　(2) 世界遺産運動の展開
Ⅲ．資源化される教会群と宗教ツーリズム
　(1) 期待される宗教ツーリズム
　(2) 宗教ツーリズムの創造：「ながさき巡礼」
　(3)「ながさき巡礼」の意義
Ⅳ．宗教ツーリズムの創造と場所の商品化
　(1)「ながさき巡礼」で何が創造されたのか
　(2) 場所の商品化の課題
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

2007年１月，「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（以下，「長崎の教会群」）は文化庁により，日本の世界文化遺産暫定リストに登録された。長崎県や関係自治体では，大きな期待と祝賀ムードのなかで報道がなされ（図１），2016年の本登録を目指して準備が続けられている。宗教施設や信仰に関わる聖地が魅力的な訪問地として観光資源化される例は枚挙に暇がなく，有力な社寺や教会，聖跡等をもつ地域ではしばしば，まちづくりや地域振興の実践にあたって，聖地が重要な観光資源として利用されている。全国各地の自治体にとって，いかにして来街者・ツーリストを惹きつけるのか，場所の魅力を発見し付加価値を創造しようとする試みは，重要な地域政策の一環とされている。

そこで本稿では筆者の既往研究に基づき[1)]，「長崎の教会群」の世界遺産運動をめぐるホスト（地域住民，教会関係者など），ゲスト（ツーリストや信徒など），プロデューサー（行政，メディア，観光業界など）の動きに焦点をあてながら，教会群が資源化される背

長崎新聞　電子号外　2007年1月23日（火）発行

「長崎の教会群」世界遺産へ

暫定リスト追加を承認

登録へ向け大きな一歩

文化庁は二十三日、世界文化遺産の候補として「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を含む四件を承認し、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の「暫定リスト」に新たに追加提出する国内遺産について、本年度の提出分を絞り込んだ。これを受け、政府は関係省庁間の調整を図った上で、二月一日までにユネスコに提出する見通し。

「暫定リスト」への掲載は各国政府の申請通りとなる。

長崎の教会群のシンボル的な存在となっている「大浦天主堂」＝長崎市南山手町（県提供）

県と五市二町が共同提案した「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、国宝・大浦天主堂（長崎市）など教会十二件、原城跡（南島原市）など関連遺産八件で構成。禁教、迫害、潜教から劇的な復活を遂げた本県特有のキリスト教文化が持つ「精神性の高さ」を全面に打ち出した。

ほかの追加分は、▽「富岡製糸場と絹産業遺産群―日本産業革命の原点」（群馬県）▽「軍艦島」（長崎市）▽「古代日本の宗像・沖ノ島と関連遺産群」（宗像市・福岡県）▽「飛騨の匠」（岐阜県）▽「紀伊山地の霊場と参詣道」（和歌山県）▽「琉球王国のグスク及び関連遺産群」（沖縄県）

※詳細は1月24日付の長崎新聞でご覧ください。

長崎新聞社制作

図１　「長崎の教会群」の世界遺産暫定登録リスト入りを伝える新聞号外
（長崎新聞社，2007年１月29日電子号外）
http://www.nagasaki-np.co.jp/press/gougai/20070123/01.pdf

キーワード：宗教ツーリズム，世界文化遺産，長崎の教会群，場所の商品化

景をツーリズムとの関連から検討することにより，聖地の資源化と場所の商品化にかかわる課題を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は以下の通りである。Ⅱ章では「長崎の教会群」が世界文化遺産暫定登録リスト入りした背景および暫定リスト入り以降の状況について検討する。続くⅢ章では，「長崎の教会群」が文化遺産化されることにより，宗教ツーリズムの対象として商品化されていく過程を，「ながさき巡礼」の創造を中心に論じる。Ⅳ章では，こうした一連の動きによる教会群の資源化の動きによってもたらされた課題を描写し，最後に聖地の資源化と場所の商品化の課題をまとめたい。

研究対象地域である長崎県は，ザビエルの平戸布教以来約460年という日本でも最古のカトリックの歴史をもち，教会数や信徒数，信徒率などの指標においても，日本国内でもっともカトリックの信仰が浸透した地域であるといえる。長崎市外海地区，平戸島，五島列島ほか教会の多くは，弾圧をのがれ，これらの地方に移住していった潜伏キリシタン[2)]がキリスト教の解禁後に集落に教会を設立し，信仰の証として受け継いできたものである。教会群の建築物や殉教地の史跡は，長崎のカトリック史の景観的な表出であり，信徒の人びとにとって信仰と祈りの場であると同時に生活の舞台でもあり続けている（図２）。

図２　宝亀教会におけるシスターと子どもたち
（2004年７月，著者撮影）

カトリック信徒の人びとにとって，信仰はすなわち彼らの歴史そのものであり，教会群や史跡は迫害や殉教，信仰の復活といった彼らの集合的記憶を強化する装置として機能している。しかしながら近年，岬の突端や山奥の集落にひっそりと佇んでいる教会を訪ね歩くツーリストが増加している。こうした現象は，信徒以外の一般のツーリストにとって，長崎の教会がもつ殉教と復活という歴史的背景に加えて，教会堂建築がもつ審美性や教会周辺の立地環境との調和性など様々な要素が複合することにより，「長崎の教会群」が信徒以外の人びとをも惹きつける魅力ある観光資源となっていることに起因すると考えられる。

しかしながら，これら長崎の教会や史跡が観光資源化される動きは，決して偶発的なものではない。本稿のねらいは，「長崎の教会群」の事例を通して，聖地創造にかかわる仕掛けを諸アクターの対応を通して検討しつつ，宗教空間がいかに観光資源化されるのか，さらには聖地の商品化にかかわる課題について検討するものである。

Ⅱ．「長崎の教会群」と世界遺産登録

（1）何が評価されたのか

周知のように，世界遺産に登録されるためには，構成資産の顕著な普遍性や価値，独自性を明証する必要がある。世界遺産条約において，世界遺産の構成資産は，①全体として顕著な普遍的価値が発揮されるのに必要な要素がすべて含まれていること（完全性）と，②個々の資産について，顕著な普遍的価値および完全性・真正性の登録時の状態が，将来にわたって維持，強化されるように担保されていること（法的保護措置），という要件を満たすことが必要である。「長崎の教会群」が世界文化遺産暫定登録リストへの掲載決定以降，長崎県知事公室世界遺産登録推進室（以下，推進室）が中心となり，推薦書作成

にかかわる準備が進められてきた。世界遺産本登録のために，「長崎の教会群」のもつ顕著な普遍的価値を証明するために必要な資産は何か。長崎県学術会議での意見交換のなかで，評価基準への適合性証明として取り上げられたのが以下の３点であった[3)]。

１）16世紀から継続するキリスト教の影響：「長崎の教会群」は450年に及ぶ日本と西洋の価値観の交流を物語る遺産であり，その交流が禁教時代の面影を留める集落景観や文化的伝統，及び日本と西洋の建築文化が融合した教会建築の発展に影響した（基準ⅱ）[4)]。

２）キリスト教に根ざした文化的伝統の存在の物証：「長崎の教会群」は，450年に及ぶキリスト教の伝播と浸透のプロセスのなかで，日本的な生活環境，自然環境及び民族的慣習に独自の形態で順応した宗教的・文化的伝統が形成されたことを物語る希有な物証である（基準ⅲ）。

３）ヨーロッパとは異なる独自の文化をもつ日本へのキリスト教の伝来と受容の劇的な歴史を示す遺産：「長崎の教会群」は，16世紀の大航海時代における国際貿易と文化交流の拡大，及び17世紀の日本と禁教と海禁（鎖国）政策の完成，そして19世紀のグローバル化の一部として開国とキリシタンの復活という，顕著な普遍的意義を有する出来事と直接関連している（基準ⅵ）。

ここで抽出された「長崎の教会群」の顕著で普遍的な価値とは，西洋と東洋の建築文化が融合して生み出された多様な展開と高い造形意匠の達成がみられたことにあるが，世界遺産登録実現のためには，ICOMOS（国際記念物遺跡会議）による厳しい審査をクリアすることが必要である。その際に「長崎の教会群」のセールスポイントは，構成資産の独自性と物語性にあると考えられる。すなわち，「長崎の教会群」が世界史に類をみない250年にも及ぶ長期にわたる潜伏からの劇的な復活という歴史のもつ独自性を示すこと，さらに長崎におけるキリシタン史が，栄光とその後の弾圧・潜伏，さらに明治期以降の復活という日本におけるキリスト教をめぐる「悲劇と忍耐の物語」を象徴していることの２点である。

大航海時代の東西文化交流と江戸時代を通じて250年にわたる迫害・潜伏という苦難を乗り越えての歴史物語を背景に，構成資産候補の絞り込みがなされた。当初は明治期から昭和初期に建築されたレンガ造りの教会建造物や，建造物としての価値は別として「被爆のマリア」といった歴史的意義のある浦上天主堂など30を超える構成資産候補があがったが，最終的に2012年６月，顕著な普遍的価値に叶う構成資産として13が選ばれた（図３）[5)]。

構成資産の選択基準として，当該資産の保全管理状況は無論のこと，世界遺産にふさわしい独自性と物語性が重要視された。「長崎の教会群」において独自性と物語性を満たす資産として次の３つのコンセプトを指摘することができる。第一に，西洋文明の伝播とキリスト教の繁栄と弾圧を示す遺跡（例えば，日野江城跡や原城跡など），第二に，キリスト教への弾圧と海禁への動きおよび潜伏キリシタンによる信仰の継承を示す信仰の場や崇敬地（例えば，平戸島の聖地と集落など），第三に，開国とキリスト教の復活を象徴的に示す教会群として，潜伏して信仰を守ってきた場所に，信仰の証として建てられた教会群（例えば，黒島天主堂，頭ヶ島天主堂，天草の崎津集落など）である。いわばこうした歴史物語に合致する形で構成資産は選択されたと言えよう。文化庁・文化審議会は，2014年７月10日，2016年の世界文化遺産の登録候補として「長崎の教会群」の推薦を決定した。2015年１月末には正式な推薦書がユネスコに提出され，2016年夏に開催される世界遺産委員会で登録の可否が決定される見込みである。

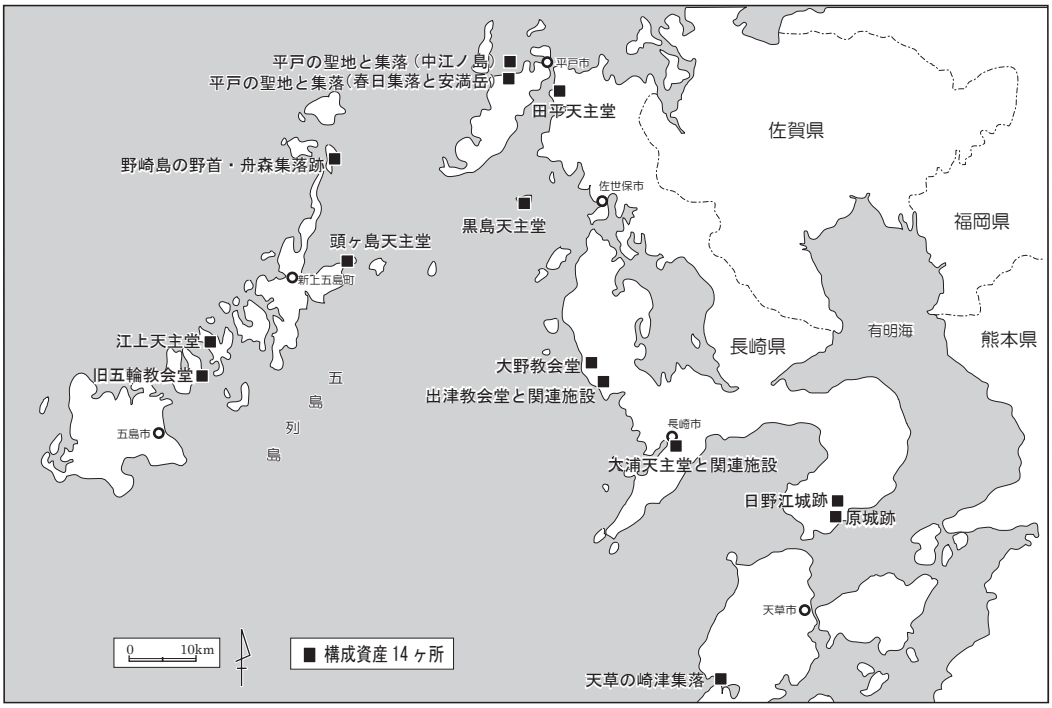

図 3　「長崎の教会群」の構成遺産（2014年）

（長崎県知事公室世界遺産登録推進室資料より作成）

(2) 世界遺産運動の展開

「長崎の教会群」が世界遺産候補に推薦されるにあたり，当然のことながら数多くの人びとがその運動に携わってきた。そのなかでも「長崎の教会群を世界遺産にする会」（以下，「世界遺産の会」）による運動が重要な役割を果たした。「世界遺産の会」は，長崎県の教会群を世界遺産に登録することを目指すために，2001年9月に設立された団体であり，建築学ほかの専門家，教会関係者，地元企業やマスメディア，行政関係者らを含めた約80名の会員から構成されている。「世界遺産の会」は，設立前後からこれまでに長崎における教会群のもつ建築的価値やカクレキリシタン[6]などの地域固有の歴史的・文化的価値にかかわる学術調査や研究，シンポジウム，写真展，企画展など幅広い啓蒙活動に取り組んできた。

「世界遺産の会」がなぜ設立されたのか，またなぜ長崎の教会や史跡その他のキリスト教遺産を世界遺産にしようとするのか。この点については，「世界遺産の会」は事務局長であるK氏の熱い思いと強い意思，努力によって展開されてきたといって過言ではない。五島市奈留島に生まれたK氏は，母方の祖父はカクレキリシタンの洗礼を授ける「水方」，父方の親族も同じく暦を知らせる「帳方」を務める家系に生まれた。長崎市役所に勤務し，旧居留地である東山手・南山手地区の重要伝統的建造物群保存地区への登録に尽力した。こうした長崎市における景観保全事業への取り組みを続けるなかでK氏は，故郷であり自分のルーツであるカクレキリシタンの末裔としてのアイデンティティを絶えず意識していたという。過疎化，超高齢化が進む離島の教会がこのまま保存の手が入らずに時

がたてば，遠からず消えていくことになる。強い危機感のもとで，いかにして教会および地域の文化を継承するのか，その最善の方法としての世界文化遺産登録であった。2000年８月に建築修復学会を奈留島で開催，教会建築物の文化的価値の調査を始めるとともに，「世界遺産の会」発足に奔走する。会の目的は，「長い信仰の歴史を背景に生み出された素晴らしい価値ある教会群が存在することを，長崎県の内外を問わず国境も越えて，できるだけ多くの人に伝達することが大切であり，そのための有効な手段として世界遺産登録を目指す」ことであった[7]。

「長崎の教会群」の価値については，「『欧州の教会と比較すると古くも大規模でも豪華でもないのでは』という受け止め方もあるが，美しい自然のなかで，素朴な庶民の生活文化・信仰とともに民衆の力を結集した手作りの教会建築とその文化は世界に比類のない長崎固有のものであり，世界遺産にふさわしい」とのコンセプトを掲げ，K氏は市役所職員としての公務のかたわら世界遺産運動に傾注していく。「長崎の教会群」世界遺産登録運動の原点は，このK氏の教会を守りたいという熱意と守る価値があるという信念であり，それにカクレキリシタンの末裔として，先祖から継承してきた記憶を次世代に継承したいという個人的な思いが相まって推進されていったものである。

筆者は2004年から「長崎の教会群」の現地調査に入り，K氏とは単なる聞きとり調査にとどまらない意見交換を重ねたが，K氏の熱意と活動なしに，世界遺産運動が展開することはなかったと確信している。「世界遺産の会」が発足し，シンポジウムや巡検，教会コンサートの実施，写真展，講演会など多彩な活動が事務局長であるK氏により進められたが，必ずしも運動は順調ではなかった。その理由は第一に，長崎県や各市町村といった行政が政教分離の原則もあり，教会群の世界遺産化に慎重な態度をとっていたことが指摘できる。教会が宗教施設としての教会である限り，行政が教会堂の保護・修復を行うことは原則として不可能であり，長崎の文化伝統としてのキリスト教が特徴的であろうとも，特定宗教に積極的に関わることは困難であった。第二に，カトリックの信徒や地域の人びともまた，教会群の価値について，懐疑的であった点である。自分たちの教会や聖地が自分たちにとっていかに重要な場所であろうとも，公共の文化財として，しかも世界遺産としての価値があるのか，確証がもてないのはむしろ当然のことであろう。K氏を中心とする「世界遺産の会」による地道な活動により，次第に人びとの間に教会群に対する価値意識が芽生えてくる。折しも2006年度に文化庁において，世界遺産暫定登録リストへの追加記載が適当な文化遺産について地方公共団体からの提案が公募された。審議の結果，2007年１月に「長崎の教会群」は暫定リストへの記載が決定した。

このことは，「長崎の教会群」にとって多方面で大きな影響を与えた。政教分離の呪縛から解放された行政は，教会群の調査および文化財としての指定・保護を推進する。「世界遺産の会」発足後より長崎のキリスト教に関連した文化財指定は進んだが，暫定リスト入りした2007年以降，登録数はとみに増加していく。2014年５月現在，国宝・国指定の文化財，史跡等は23を数えるが，このうち2007年以降の指定・選定は12件を数える[8]。同時に文化遺産化への動きは，ツーリズムの資源として期待を集めることにもなる。

Ⅲ．資源化される教会群と宗教ツーリズム

(1) 期待される宗教ツーリズム

文化資源としての教会群は，当然のことながら長崎県においても観光資源の重要なコンテンツとして認識されている。とくに１人あたりの観光消費額が大きく，教養・学習型観

光に関心の高い高齢層をターゲットとした観光資源の開拓は喫緊の課題である。「長崎の教会群」の世界遺産運動とほぼ同時期に開始されたのが，2005年度に始まった「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」である。このプロジェクトは，長崎県長期総合計画（2001～2010年）における後期5か年計画（2006～2010年）内の重点プロジェクトの１つである「文化を活かした地域活力創出プロジェクト」における主要事業である。県内に数多く残る歴史・文化遺産にストーリー性をもたせ，人々が訪れてみたくなるような新しい魅力を発見・創出する事業で，長崎県の教育委員会と観光課が共同して進める点に特徴がある。キリシタン文化や大陸との交流など長崎県の特色といえる歴史テーマを選定し，「地域ストーリー」を描き出すことによって場所の魅力を高め，観光振興につなげていこうとする企図といえる。

これは県内外の有識者や財界関係者らによって組織される「推進会議」によって設定された歴史テーマに基づき，「ストーリーづくり専門部会（教育委員会）」による長崎県の歴史文化遺産にかかわるストーリー創出の試みである。ここでは地域的な意味づけが付与された観光ルート作成や観光商品開発など，歴史文化という地域固有の資源を観光振興と結びつける（「観光専門部会（観光振興課）」）ことを通して，長崎県の歴史ブランドづくりが意図されている。

数ある歴史テーマのなかで，最初に取り上げられたのは，他県にも類がなく，海外にも発信できる理由から「キリシタン文化」であった。プロジェクトの成果として教養書を兼ねたガイドブックが刊行された[9)]。ここでは聖フランシスコ・ザビエルの平戸来航から，長崎のキリシタン大名，天正遣欧使節，26聖人の殉教と島原の乱，江戸時代におけるカクレキリシタンなどの題材で長崎のキリシタン文化の歴史と名所を解説するとともに，宗教ツーリズムのガイドブックとしての役割を担っている。

教会群を活かした宗教ツーリズムへの期待は，観光資源に乏しく，かつ交通条件の悪い五島列島，とりわけ人口規模が小さい上五島（新上五島町）においてより高いものとなる。新上五島町は，五島列島の北部に位置し（図３），中通島と若松島を中心とする7つの有人島と60余りの無人島からなる。九州本土とは航路により，佐世保港，長崎港，福岡港と結ばれており，最短の有川港から佐世保港まで高速船で1時間20分程度の距離にある。

五島列島にキリスト教が伝わったのは1566年のことであり，1570年代には福江島（下五島）に教会が設立されるなどキリシタンの信仰が広まった。その後弾圧により衰微するが，大村藩領であった外海地方から厳しい取り締まりを逃れ，五島へとキリシタンが移住を開始（1797年）して以降，合計で3,000人ものキリシタンが移住したとされる。移住後の生活は厳しく，耕地もほとんどない山間部や漁に不便な海浜への散住を余儀なくされ，貧困や社会的差別も少なくなかった。こうした潜伏期の労苦を耐えてキリスト教が解禁された後，明治中期から大正期以降にかけて，信者らの手によりカトリック教会堂が建てられていった。これらのなかには，五島列島出身の棟梁で教会堂の設計・施工で名高い鉄川与助によるものも数多く残されており，現在，国指定重要文化財指定は２件（青砂ヶ浦教会と頭ヶ島教会），このうち頭ヶ島教会は世界遺産の構成資産の１つとなっている。新上五島町民の約４分の１はカトリック信徒であり，教会堂は29ある。

新上五島町では，2007年２月，「明日の世界遺産に出会う島・上五島」をテーマ・コンセプトとする観光振興ビジョンを策定している。ここでは大司教認定のオフィシャルガイドつき巡礼ツアーの開発や海から見る教会クルージングツアー，聖歌体験など教会内での

体験プログラムの開発，チャーチコンサートやクリスマスイルミネーションといったイベント開催など骨子とする事業イメージが打ちだされた。Iターン・Uターン者の見込めない島において，観光振興による交流人口の増加は集落維持を図るうえで重要な方策である。公共投資の縮小や超少子高齢化の進展，脆弱な産業基盤といった離島をとりまく社会・経済的条件のもと，折しも世界遺産暫定登録リスト入りした「長崎の教会群」は，最有力なコンテンツとなった。

上五島を対象としたパッケージツアーでは，キリシタン関連の施設が重要な観光資源として用いられている。こうした施設に椿油，五島うどんなどの名産品を組み合わせて，中高年の女性による比較的少人数のグループをターゲットとした「癒し系」の観光戦略が企図されている。図4は木口汽船による久賀島（ひさか）ツアーの様子である。世界遺産候補である旧五輪教会（図5）や殉教地である牢屋の窄（さこ），浜脇教会等をめぐる。社長みずから汽船の操縦およびツアーガイドを務め，ツーリストに対して教会や悲劇の歴史を語る。社長自身，潜伏キリシタンの末裔であり，潜伏キリシタンの末裔がツアーガイドを務めることにより，宗教ツーリズムにおける体験の真正性が強化されているといえよう。図6は若松島にあるキリシタン洞窟である。明治初頭の五島崩れ（五島におけるキリシタン弾圧）時に迫害を避けた信徒が陸路からは接近することのできない，断崖の洞窟に身をひそめたが，たき火の煙を監視船に見つけられ，キリシタンたちは捕縄され，拷問を受けた歴史がある。図6にみられる十字架は1967年に建てられたものであるが，現在，巡礼ツアーもしくは海上タクシーで訪問することができる。こうしたオルタナティブなツーリズムの対象として，離島にある教会群および殉教の聖地が資源化されている様子が窺える。

図4　久賀島における宗教ツーリズムの様子
（2007年2月，著者撮影）

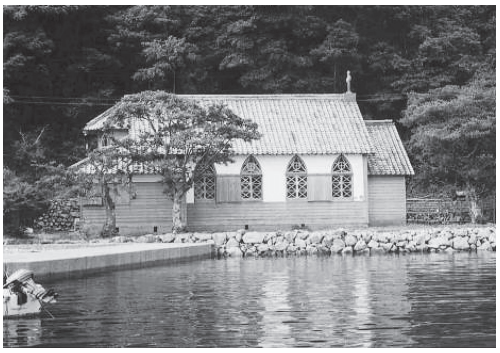

図5　旧五輪教会
（2004年7月，著者撮影）

図6　キリシタン洞窟
（2008年8月，著者撮影）

(2) 宗教ツーリズムの創造：「ながさき巡礼」

教会めぐりを主とする宗教ツーリズムを促進する動きは，地域社会側からの働きかけによるものだけではない。カトリック教会側でも，ミサや冠婚葬祭など信徒の信仰生活に影響の生じない範囲で，非信徒（ツーリスト）に対してカトリックをアピールしていく手段の１つとして，教会群や殉教地をめぐる宗教ツーリズムを打ち出している。例えば聖地巡礼者の案内書として2005年には，カトリック長崎大司教区監修による『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』が刊行された[10]。本書は長崎県内と天草（熊本県）にあるカトリック教会のガイドブックであるが，教会堂建築や教会に関する歴史の紹介にとどまらず，教会に番号を付し，教会めぐりの聖地巡礼化を図っている。本書後半では，殉教者を偲ぶ巡礼地ガイドとして，各地の殉教地や記念碑，墓地・墓碑，セミナリオ跡などを紹介し，聖地巡礼の対象地として紹介している。このような宗教ツーリズムを誘う動きとして創造されたのが「ながさき巡礼」である。

「ながさき巡礼」は，長崎県（観光振興推進本部）とカトリック長崎大司教区との協働により，先述した「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」を受けて企画化された。2006年7月に始まった「ながさき巡礼」創造にかかわる検討会議では，単なる物見遊山ではないツーリズムの構築が志向された。カトリック側からは教会理解のためのツーリズムであることが強く要請された。県側も教会を長崎における文化・歴史の表出としてのツーリズムの対象であることを確認しつつ，取り組んでいくことが確認された。

こうした両者による具体的な意見交換が進められるなかで，絶えず焦点化する課題は，信仰とツーリズムをめぐる葛藤である。大司教区側からは，「教会は観光施設ではない」ことを大前提とし，見学マナーやルール作りだけでなく，教会に対する理解促進が求められた。

一方，県としては巡礼の形態や対象など，信仰にかかわることについては，大司教区の考えを尊重しつつ，それらをいかにツーリズムに利用できるかが重要となる。

両者の主張に大きな隔たりがあるわけではなく，長崎県としても，教会群やキリシタン文化を単なる観光資源とみなしているわけではない。「ながさき巡礼」の構築とは，教会群やキリシタン文化の根底になる長崎の歴史や文化，人びとの生活の営みを具象化する試みと理解することができる。教会群やキリシタン文化は長崎の歴史における重要なコンテンツであり，「ながさき巡礼」で描かれる歴史物語（ストーリー）がいかに訪問者の関心を惹きつけるかが，関心事となる。

「辺鄙な離島の辺鄙なところにある教会」を訪れたツーリストが，なぜこのような場所に教会が建てられ，これまで信仰の灯を維持してきたのか，教会を通して地域の歴史や文化の理解を促し，共感的理解を得るような仕掛けの構築が「ながさき巡礼」において企図されているといえよう。

そのためにも長崎大司教区側からは，巡礼マナーやカトリックの歴史，教義を理解したガイド養成のためのプログラムが検討され，ツーリストが喜び教会も歓迎するような信仰と観光のコラボレーションが期待されている。「ながさき」らしい巡礼を創造するための協同作業であることが確認されており，巡礼のロゴマーク（図７）やスタイル（衣装や

図７　「ながさき巡礼」のロゴマーク

施設）の構築，公式ガイド・マニュアルの作成，エージェント向けのモニターツアー（福岡，東京，大阪，名古屋）などが行われている。例えば，「ながさき巡礼」ガイド養成スクーリングでは，カトリック教会の歴史やキリストの生涯，神学概論，世界と日本の巡礼，鉄川与助と長崎の教会遺産，長崎の教会史，長崎県内の巡礼地について講義を受けるとともに，現地研修として，日帰りの巡礼やミサ体験などが行われている。

このように「ながさき巡礼」とは，長崎県内各地に残る有形・無形のキリスト教関連の文化財の価値を再検証し，カトリック長崎大司教区との協議の上，公式の「ながさき巡礼の道（ルート）」を創造する試みとして進められたといえる。これをツーリズムの文脈に則していえば，カトリックの公認を得た新しい巡礼の道を創造し，長崎県の観光振興に寄与しようとする試みといえよう。

「ながさき巡礼」の創造の取り組みは，2007年度から3か年の計画で財団法人高速道路交流推進財団の補助金を受けて本格化した。具体的な活動指針としては，長崎大司教区との協働による「巡礼地」の選定と巡礼の道づくり，巡礼ルールや公認ガイドの育成，「ながさき巡礼マップ」を作成し，イベント開催や各種メディアを通して広く情報発信をしていくことが挙げられる。巡礼創造の母体として「ながさき巡礼」検討委員会が設けられた。長崎県と長崎大司教区を中心に，個々の教会や関心をもつ信徒，市町村関係者，ボランティアの人たちが参加して，巡礼づくりを進められている。そこでは，教会およびキリシタン資源に関する基礎調査の実施や公認巡礼の手引き（マニュアル）の作成，公認巡礼ガイドの育成，巡礼ルート案内板・教会案内板の設置，さらにはながさき巡礼にかかわる情報発信活動が進められている。

こうした企画を受けて，長崎大司教区では，2007年5月に「長崎巡礼センター」を開設し専任スタッフを配置している。長崎県内390の巡礼地と巡礼関連地を6地区（長崎市・西彼杵地区，島原・雲仙エリア，大村地区，平戸・生月・田平地区，佐世保・上五島地区，五島・福江島地区）に分け，巡礼のモデルコースとして紹介するほか，カトリック史などに詳しい巡礼ガイドを派遣するなどの対応も始めた。同センターは2008年8月にNPO法人を設立し，現在にいたっている。2009年10月，長崎県内に4か所（長崎市出島地区，同外海地区，五島市，新上五島町）の地域ステーションを設け，「ながさき巡礼」に関する，1）調査・研究および情報発信事業，2）ガイドの実施および養成といった啓発事業，3）巡礼の活用と地域活性化に関する企画・支援事業，4）巡礼にかかわる宿泊施設等の運営・支援事業，などを主な活動内容としている[11)]。

「ながさき巡礼」の商品化の一例として，五島列島（福江・奈良尾）と長崎港（佐世保港）を結ぶ航路をもつ九州商船によるパッケージツアーが挙げられる。九州商船では，2012年から「ながさき巡礼」として，1泊2日（A，Cコース）と2泊3日（B，Dコース）の計4コースを作り商品化している。A, Bコースは長崎港発着で福江島を中心とする下五島コースであり，Aコースでは2島，Bコースでは4島をめぐる巡礼である。同様にC, Dコースは長崎港もしくは佐世保港発着で中通島を中心とする上五島コースであり，いずれも中通島と若松島の2島の聖地を巡礼する。島内ではタクシー利用となり，料金は1泊2日で約4.5～5万円（2名1組，1人当たり料金），2泊3日で約6.8～7.6万円（同）である。全コースとも長崎大司教区公認の巡礼ガイドが同行する。値段設定をみても，団塊世代をターゲットとした少人数でガイド付きのツアーであり，教養・学習型を主とするテーマ型観光の一環であることが窺える。

(3)「ながさき巡礼」の意義

カトリック側が「ながさき巡礼」のツーリストに期待しているのは，教会の外観を見学するだけでなく，キリシタン史への理解である。そのためにも大司教区が主体となって，巡礼ガイドブックを作成した[12]。ガイドブックでは，まず巡礼地や殉教といった言葉の定義を行い，巡礼地の案内や紹介，コース設定を行っている。巡礼地には，1）長崎県内のすべての教会，2）殉教地，3）バチカン公式巡礼地，が含まれる。

巡礼地に続き，長崎のキリシタン史を理解するうえで重要な場所を巡礼関連地として取り上げている。これは大司教区として，巡礼者に可能であれば訪問してほしい場所を意味している。例えばキリシタン墓碑や史跡，岩戸山（島原半島）のようにキリシタンによる仏教迫害の地といったカトリックにとって負の歴史も取り上げている。天草のような熊本県の教会や大村キリシタンの流れをくむ嬉野や馬渡島といった佐賀県の教会なども長崎にかかわりのあるキリシタン文化として取り上げている。

消費者であるツーリストのニーズが多様化し，既存の観光資源の価値が変化するなかで，長崎県では，「ながさき巡礼」の創出を単純な観光資源の創出ではなく，新しい文化創造として位置付けている。すなわち，ツーリストが地域の歴史・文化や人々とふれあいながら，人生を振り返る契機とし，様々な安らぎや癒しを味わうことが出来る文化の創造である。「ながさき巡礼」が浸透することによって，多様な人々の交流が生まれ，地域の歴史文化の継承や創造へと波及し，ひいては，長崎県全体の歴史文化の発展に貢献することが期待されており，その推進力としてのツーリズムへの期待でもある。

一方，教会側では，「ながさき巡礼」をオーセンティックな巡礼を創造したいとする期待も大きい。ここでいうオーセンティックな巡礼とは，本来のカトリック信徒による巡礼という意味ではなく，場所の体験的理解にあるという。巡礼を通して，その場所で生起したことを理解する，そして巡礼者となることを通して，自分自身も大きな影響を受け生まれ変わっていく。長崎巡礼センターによれば，このような実存的な場所体験を生み出す装置として，同センターが機能することが必要であるという。すなわちツーリストや「偽者の」巡礼者を「本物の」巡礼者に変えるような巡礼システムの構築こそが目標とされている。

巡礼センターでは，長崎大司教の言葉として，以下の説明を「ながさき巡礼」のコンセプトとしている[13]。

> 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産への暫定登録や188人の殉教者の列福式をきっかけに、長崎を訪れたいと思う人々が増えてきました。しかも、単にその場所を訪れるだけでなくその場所で時間を遡り、さまざまな人々の生き方に思いを馳せ、何かをつかみ取ろうとする「心の旅〈巡礼〉」へと導かれているようです。
>
> 巡礼とは、すべての人が平和を共有できる世界が来ることを願う「心の旅」なのではないでしょうか。それはこの世に生きる人の共通の思いのはずです。
>
> 長崎は、宗教的迫害や原爆など、さまざまな苦難を見てきた土地のひとつです。ここに住む多くの人々が苦しみ、そして生きてきました。
>
> なぜ、苦しまなければいけなかったのか…同じような不幸が二度と起こらないようにするには……「ながさき巡礼」は、考える機会を得られる旅です。まさに長崎のカトリックの歴史は、そのような「すばらしい巡礼」の機会を提供できる「すばらしい場」をもっているのです。

こうしてみると，「ながさき巡礼」の背景には様々な要因がある。つまり，巡礼発展によるツーリストの増加を期待する地元自治体の政治・経済的な要請，カトリック側の宗教的理念と布教戦略，スピリチュアルブームといった社会的・宗教的状況，団塊の世代の退職に伴うヘリテージツーリズムへの関心の高まりなどを背景に，「ながさき巡礼」構築への取り組みがなされているといえよう。

Ⅳ．宗教ツーリズムの創造と場所の商品化

(1)「ながさき巡礼」で何が創造されたのか

「ながさき巡礼」で創造されているものは何であろうか。先述したように，巡礼ルートやロゴマーク，公式ガイドといった巡礼スタイルの構築を通して，「ながさき巡礼」の実体づくりは進められてきた。同時にこれらの巡礼スタイルのプロモーション活動は，旅行代理店に対して行われており，「ながさき巡礼」の商品化が図られている。しかしここで重要なことは，巡礼スタイルのもとになる「巡礼ストーリー」の構築にあると考える。公式ガイドブックの作成は，キリシタンの歴史的価値や教会建築の文化的価値を正当化し，殉教の物語を神話化する機能を有している。「ながさき巡礼」創造の試みは，巡礼価値そのものの創造であり，そこで生産されるのは消費される聖地の物語である。カトリックの巡礼者のみならず，ツーリストにとっても，長崎の教会群をめぐる価値を創出し，そこに意味を見出すことのできる物語を描くことが重要とされるのである。

「ながさき巡礼」の構築は，長崎県の行政やカトリック側の動きだけでなされるものではない。長崎の教会群が巡礼対象となるうえで，価値を媒介し，それを流通させる役割を果たす存在は重要である。1990年代以降，NHKをはじめとするマスメディアや芸術家，有識者らが，映像や写真集，研究活動などを通して，長崎の教会の価値を見出していった。するとそれまで多くの人にとって関心の対象外であった教会群に価値発見がなされ，教会群が巡礼の対象としてマーキングがなされていくことになった。その仕掛け人となったのは，第一に先述した「世界遺産の会」の設立（2001年）であり，また在京のカメラマンによる巡礼マップ（図８）や巡礼スタンプ帳（図９）の作成も大きく寄与した。これらの仕掛け人はいずれも，潜伏キリシタンの末裔であり，教会の価値を自分のアイデンティティと重ねあわせることが可能であり，失われつつある教会に対する危機感に突き動かされる形での行動であった。こうした運動は2007年１月に世界文化遺産暫定登録リスト入りという形で結実する。政教分離のディレンマから解放された行政と2008年11月に日本初の列福式を長崎で開催することになった長崎大司教区は，信仰とツーリズムというディレ

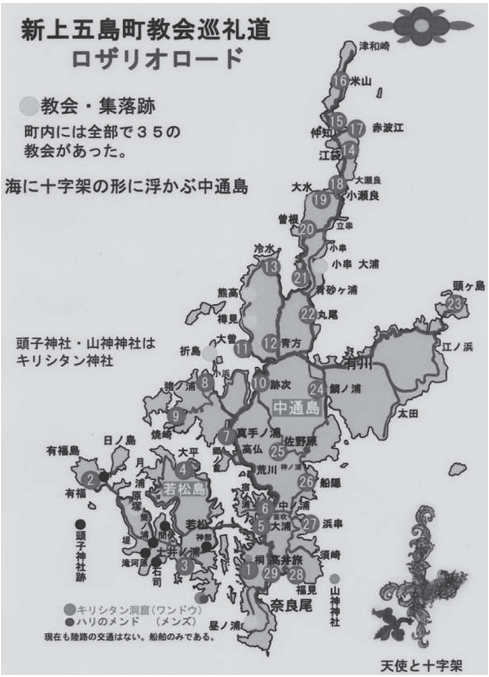

図８　巡礼マップの例
（峰脇英樹氏作成）

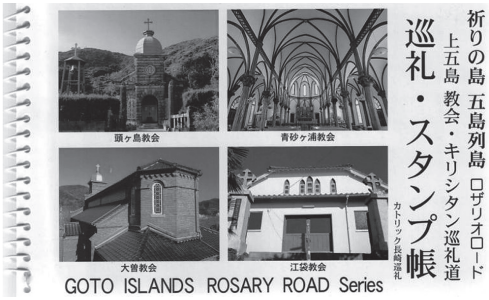

図 9　巡礼スタンプ帳（表紙）
（峰脇英樹氏作成）

ンマを抱えつつも，「ながさき巡礼」を協働で構築していったといえよう。

ツーリストが長崎の教会群めぐりに期待しているのは，教会やキリシタンの文化を育んできた長崎の人々の歴史や風土をめぐる物語を記号として消費することとも言えるだろう。キリシタンをめぐる長崎の文化と歴史は，長崎の文化的景観として，立地環境である農山村の景観と分かちがたく結びついている。長崎県における観光のまなざしは従来，温泉やテーマパーク（ハウステンボス），あるいは都市内部でのアトラクションに向けられてきた。これら「点と線」のツーリズムに対して，宗教ツーリズムは，それまで看過されてきた「面」にあたる農山村の文化的景観そのものに焦点をあてるものと言えるだろう。

(2) 場所の商品化の課題

文化遺産とりわけ世界文化遺産は，文化観光において，非常に有効なコンテンツとして用いられているが，このような場所のヘリテージ化，およびそれと密接に関係する場所の消費にかかわる課題として，ここでは次の3点を指摘したい[14]。

第一に，場所のテーマ化・パッケージ化・カタログ化，すなわち場所の断片的理解と消費ともいうべき現象が進行する点である[15]。場所がヘリテージ化[16]され，農村は文化観光の対象として記号消費される。その際に，ツーリストは，自分のイメージに合致する場所やアトラクションを消費する。その時に，本来持っていた場所のまとまりや全体性は捨象され，消費者の嗜好性に沿う形でテーマ化，パッケージ化が進められる。場所をめぐる物語の構築も，このような場所のカタログ化をさらに促進する機能を有している。場所の物語がさらに当該農村のロカリティ（場所らしさ）[17]を創り出し，時には捏造に近い形で強引に創出されていく場合もみられる。このような消費者の嗜好に合うロカリティは強調され，適合しないものは捨象されていくプロセスが現代の場所において，不断に進行しているのである。

第二に，ヘリテージ化によって創出されるロカリティが，住民アイデンティティの強化と分裂の状況を生み出す点である。自らの生活空間がヘリテージ化することは，住民にとって，アイデンティティの再確認や強化につながる。これは農村だけではなく都市住民においても，例えば景観修景事業による町並み保全のように，住民にとって自分の町を誇りに思う気持ちや態度が，個人のアイデンティティと結びつくケースは指摘されよう。ただし，そのアイデンティティの再確認・強化の様態は一様ではない。ロカリティの創出は，地域のなかの特定の時代・場所・担い手における特徴を切り取る形で生み出されるので，その選択の基準は多様で，決定は多分にポリティカルな面を有する。「長崎の教会群」でいえば，キリシタン文化が長崎の象徴的なロカリティを獲得するのは，世界遺産運動の流れのなかで教会群とそれを取り巻く文化的景観がヘリテージ化されたためであり，その受け止め方は，カトリックの信徒・非信徒・カクレキリシタンの信徒で異なる。この意味でも，場所のモザイク化・断片化は進行する可能性が指摘される。

第三に，ロカリティの安直な創造にかかわる危険性である。ロカリティ構築の試みは主として，各種メディアを媒介した言説空間にて行われている。観光連盟の公式ウェブサイトや観光パンフレット，公式ガイドブック等，埋没していた農村における文化資源の発見は，このようなメディアを通して伝達され，その実態にあたる部分は後付けになることも少なくない。「失敗を恐れずに」創出されるロカリティは，商品として魅力をもたなければ廃棄され，後発のロカリティが続々と誕生し，商品化されていく現実がある。そこでは当然，地域づくりの姿勢が問われるべきであるし，その狭間で翻弄される住民の姿がみえる。

長崎県の観光戦略としては，テーマ型観光の推進が指摘されているが，長崎県における「キリシタン文化」がいかに重要でかけがえのないテーマであるとしても，それは決して唯一のテーマではない。あくまでもテーマ観光の１つである。実際に「キリシタン文化」に続いて「近代の産業遺産・軍艦島」といった新規のテーマが創出されており，周知のようにこの軍艦島もまた「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の構成資産のひとつとして世界遺産登録が期待されている。こうした意味でもキリシタン巡礼によるロカリティの創出は，絶えず他のテーマによる挑戦を受け続けることになるといえよう。

最後に，ヘリテージツーリズムという視点から場所の商品化を考えると，次の２点が看取されよう。１つは，社会的コンテクストの時間的・空間的変化に伴い，場所がヘリテージ化されている実態である。交通機関や各種メディアの発達に伴う場所間の競合の激化や人々のツーリズムに対する志向性の変化，地域社会の変容といった場所をとりまく外部環境の変化に加え，世界遺産登録運動のようなアクターの存在により，ロカリティの創出による場所の商品化への動きは加速度を増している。

２つ目は，こうしたロカリティの創出を介して生成される観光空間とは，神田[18]が指摘するように，観光にかかわる多様なアクター（ここでは行政や長崎大司教区，観光関連業界，各種メディア，信徒，ゲストら）の思惑がせめぎ合う相互作用の空間であり，強調・競合の発生する重層的な空間二重性（ゲストにとっての非日常空間としての性格とホストにとっての日常空間としての性格）を持つ。こうした観光空間のもつ重層的な性格および保存と開発という対抗的な場としての性格が，場所に持ち込まれることこそが，ポスト生産主義における場所の課題とも言えるだろう。

同時に，カトリックへの社会的差別やカクレキリシタンの問題など，これまで観光の文脈では無視されてきた問題にも焦点が当てられる可能性が指摘されている。こうした負の歴史に対する理解を抜きにして，本物の「ながさき巡礼」は成立しないとも考えられる。このことは同時に，地域の人々にとって大きな痛みを伴う問題でもある。本稿では紙幅の都合もあり，ツーリズムがもたらす歴史修正主義の問題については検討できなかった。もって今後の課題としたい。

Ⅴ．おわりに

以上本稿では，「長崎の教会群」の世界遺産登録運動にかかわる主要なホスト・ゲスト・プロデューサーの動きに着目しつつ，「長崎の教会群」の資源化の背景をツーリズムとの関連から検討することを通して，聖地のヘリテージ化・観光資源化の実態およびその課題を明らかにした。本稿で得られた知見を整理すると以下の６点となる。

１）「長崎の教会群」が日本における世界文化遺産暫定登録リスト入り（2007年１月）した際に，構成遺産の顕著な普遍性や価値，独自性として評価されたのは，教会群の建造

物の造形意匠に加えて，その独自性と物語性にあった。世界史に類をみない長期の潜伏からの劇的な復活という歴史のもつ独自性と，この文化的伝統が日本におけるカトリックの栄光とその後の弾圧・潜伏，さらに明治期以降の復活という悲劇と忍耐の物語性が特に評価を受けた。最終的に13の構成資産が選ばれたが，これらの選択基準としてこの歴史物語へ合致することが重要であった。

2）「長崎の教会群」の世界遺産運動のなかで最も重要な役割を果たしたのが「世界遺産の会」である。なかでも同会の中心人物であるK事務局長は，カクレキリシタンの末裔としてのルーツをもつ。過疎化・高齢化が著しく進む長崎において，貴重な地域の文化・歴史の表出としての教会および関連遺産が失われてしまうことに対する強い危機意識が世界遺産運動の根底にあった。

3）「長崎の教会群」が世界文化遺産暫定登録リスト入りした前後から，教会群を観光資源として活用しようとする動きも同時に活発化した。長崎県では，「ながさき歴史発見・発信プロジェクト」により，県内の歴史・文化遺産にストーリー性をもたせ，観光資源としての魅力を発見・創出する事業が開始され，キリシタンは最初のテーマとして選定された。こうした教会群を活かした宗教ツーリズムへの期待は，とくに観光資源に乏しく交通条件の悪い五島列島では大きく，島内の教会群や殉教の聖地に対する観光のまなざしが生み出されていった。

4）こうした宗教ツーリズムの動きは，長崎県とカトリックの協働による「ながさき巡礼」の構築においてさらに促進された。「ながさき巡礼」は教会群の文化遺産化による保護と観光資源としての活用を企図する長崎県と，ツーリズムを通して教会や教義の理解を進めたい長崎大司教区の思惑が合致する形で進められた。2007年5月に長崎巡礼センターが設置され，巡礼にかかわる情報発信事業や啓発事業，地域活性化に係る企画・支援を行っている。

5）「ながさき巡礼」で創造されたのは，巡礼スタイルとともに巡礼ストーリーの構築である。その本質は巡礼価値そのものの創造であり，消費される聖地の物語が生み出された。

6）「長崎の教会群」を対象とする宗教ツーリズムを場所の商品化としてとらえるとき，そこには様々な課題がある。場所の断片的な消費とロカリティの安直な生産の危険性，さらには生産されたロカリティが住民のアイデンティティに及ぼす影響についても検討の必要があることが言及された。

（筑波大学）

〔付記〕

資料収集において，長崎県世界遺産登録推進室および長崎県文化観光物産局の皆様には大変お世話になりました。本研究にかかわる調査と取りまとめには，平成26年度科研費・基盤研究C（23520962A　研究代表者・平岡昭利）および筑波大学重点経費・イノベーション創出・社会貢献事業の経費の一部を利用した。また本シンポジウムのコーディネーター，コメンテーターおよび会場の皆様方からは貴重な意見を頂戴した。資料整理と製図では，筑波大学技術補佐員の増山泰子氏の助力を得た。厚く御礼申し上げます。

〔注〕

1）①松井圭介『観光戦略としての宗教―長崎の教会群と場所の商品化―』筑波大学出版会，2013。②松井圭介「ヘリテージ化される聖地と場所の商品化」山中 弘編『宗教とツーリズム』世界思想社，2012，192-214頁。

2）「キリシタン」（*Cristão*）とは，ポルトガル語でキリスト教徒の意味であるが，慣例としてキリスト教禁制以前におけるカトリックの信者を指す。本稿では，明治初期のキリスト教解禁前後までの，カトリック信徒を表す言葉としてキリシタンを用いる。なお潜伏キリシタンとは，寛永期鎖国後のキ

リスト教禁制下に表面は仏教徒をよそおい，宗門改めに応じつつ信仰を持続した信者を指す。日本基督教協議会文諸事業部キリスト教大事典編集委員会編『キリスト教大事典』教文館，1970，659頁。

3）長崎県知事公室世界遺産登録推進室「長崎県から世界遺産を：長崎の教会群とキリスト教関連資産」長崎県．https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/outline/01.html（最終閲覧日：2014年12月20日）

4）社団法人日本ユネスコ協会によれば（http://www.unesco.or.jp/isan/decides/），世界遺産に登録されるためには，10の登録基準のうちいずれか１つ以上に合致するとともに，真正性や完全性の条件を満たし，かつ国内法によって適切な保護管理体制がなされていることが必要である。推進室では，「長崎の教会群」の場合，以下の３つの基準に当てはまるものと解釈されている。

基準ⅱ：建築，科学技術，記念碑，都市計画，景観設計の発展に重要な影響を与えた，ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。

基準ⅲ：現存するか消滅しているかにかかわらず，ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

基準ⅵ：顕著な普遍的価値を有する出来事（行事），生きた伝統，思想，信仰，芸術的作品，あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。

5）2014年12月に「平戸島の聖地と集落」が，「平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳）」と「平戸の聖地と集落（中江ノ島）」に分割され，構成資産数は14となった。前掲３）https://www.pref.nagasaki.jp/s_isan/assets/（最終閲覧日：2015年１月25日）

6）カクレキリシタンとは，キリスト教の解禁後も潜伏キリシタン時の習俗・信仰を持続した信者を意味する。古キリシタンや旧キリシタンと呼ばれることもあるが，本稿ではカクレキリシタンとする。

7）「世界遺産の会」HPによる（最終閲覧日：2014年12月20日）。
http://www.heritage-nagasaki.jp/jp/page.html

8）内訳は，国宝１（大浦天主堂），国指定史跡４（日野江城跡ほか），国指定重要文化財10（大野教会堂，頭ヶ島天主堂ほか），国指定重要文化的景観８（平戸島の文化的景観ほか）である。

9）長崎県『旅する長崎学１～６（キリシタン文化編）』長崎文献社，2006-7.

10）長崎文献社編・カトリック長崎大司教区監修『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』長崎文献社，2005。

11）NPO法人長崎巡礼センターHPによる（最終閲覧日：2014年11月20日）。
http://www.nagasaki-junrei-center.jp/?cat=9

12）カトリック長崎大司教区監修『ザビエルと歩く ながさき巡礼』長崎文献社，2005。

13）「NPO法人長崎巡礼センター」HPによる（最終閲覧日：2014年12月20日）。
http://www.nagasaki-junrei-center.jp/?cat=8

14）場所の商品化の課題については，前掲1）①157-171頁，②208-212頁を参照。

15）Cloke, P., “The countryside as commodity: New rural spaces for leisure” in Glyptis S. ed., *Leisure and environment: Essays in honour of Professor Patmore*, Belhaven press, 1993, pp.53-67.

16）ここでヘリテージ化（heritagization）とは，世界遺産運動に伴い，その対象となる資産が文化財に指定・登録されていくことを意味している。前掲1）② 192頁。

17）Matsui, K., “Commodification of a rural space in a World Heritage Registration Movement: Case study of Nagasaki Church Group” *Geographical Review of Japan Series B*, 82, 2010, pp.149-166.

18）神田孝治編著『観光の空間』ナカニシヤ出版，2009。

The Nagasaki Church Group and Religious Tourism

MATSUI Keisuke

This paper focuses on the actions of the main hosts, guests, and producers in relation to the movement to register the "Nagasaki Church Group" as a UNESCO World Cultural Heritage Site, while also elucidating the reality and problems of heritage designation and transformation into tourist attractions via an examination of the Nagasaki Church Group as a tourist attraction from the viewpoint of its relationship with tourism. The knowledge gained from this study can be organized into the following six points:

1) When the Nagasaki Church Group entered the tentative list of World Cultural Heritage Sites in Japan in January 2007, it was evaluated for the notable universality, value, and individuality of its constitutive heritage sites, which stem from their originality and narrative quality, in addition to the formative design of the church buildings. In particular, the churches were praised for the uniqueness of their history, which is one of dramatic revival from a long period of concealment unparalleled in world history; the narrative quality of tragedy and endurance of this cultural tradition in terms of the glory of Catholicism in Japan and its subsequent suppression and concealment; and its revitalization from the Meiji period onwards. Thirteen constitutive heritage sites were ultimately selected; conformance with this historical narrative was an important criterion for their selection.

2) The most important role in the movement to register the Nagasaki Church Group as a World Cultural Heritage Site was played by the "World Heritage Club" *(Sekai Isan no Kai)*. The secretary general Mr. K, the central figure within this group, possesses roots as a descendant of Hidden Christians, and in Nagasaki (where the rapid decline and aging of the population is notable) the strong sense of crisis towards the loss of the churches and related heritage sites as valuable expressions of the regional culture and history was at the center of the movement to register the churches as a World Cultural Heritage Site.

3) From around the time that the Nagasaki Church Group entered the tentative list of World Cultural Heritage Sites, a movement to attempt to utilize churches as tourist attractions was simultaneously activated. In Nagasaki Prefecture, work commenced to attach a narrative to historical and cultural heritage sites within the prefecture, and to discover or create their appeal as tourist attractions in accordance with the "Nagasaki Historical Discovery and Transmission Project." Christianity was selected as the initial theme. There were particularly strong expectations towards such religious tourism utilizing the group of churches in the Goto Islands, which are lacking in tourist attractions and have poor transportation, and a focus on tourism in relation to churches and sacred sites of martyrdom on the islands emerged.

4) Such movements for religious tourism were further facilitated by the construction of the "Nagasaki Pilgrimage," a collaboration between Nagasaki Prefecture and the Catholic Church. The Nagasaki Pilgrimage was promoted in the form of a concurrence of intentions between Nagasaki Prefecture, which aimed for the conservation and utilization of its churches as a tourist attraction by means of their transformation into a Cultural Heritage Site, and the Archdiocese of Nagasaki, which desired to promote understanding of the Church and Catholic doctrine through tourism. The Nagasaki Pilgrimage Center was established in May 2007, and projects to transmit and disseminate information related to pilgrimages as well as schemes and support for regional revitalization are being conducted.

5) A pilgrimage style and the structure of a pilgrimage story were created by the Nagasaki Pilgrimage; the essence of these was the creation of values for the pilgrimage itself, and a consumable sacred site narrative was generated.

6) Various problems arise when interpreting religious tourism that targets the Nagasaki Church Group as commodification of a place. It was indicated that it is necessary to examine the fragmentary consumption of a place and cheap manufacture of locality in addition to their risks and impacts on the identity of local residents.

Key words: religious tourism, World Cultural Heritage, Nagasaki Church Group, commodification of place